

日蓮遺文の真偽問題に対する一考察

「日女御前御返事偽書説」批判

山崎 斎 明

日蓮は『顕仏未来記』において、釈尊・天台・伝教に自らを加えて「三国四師」（定遺七四二頁）と述べている。伝教の法灯を継ぐ立場である天台座主、慈覚・智証を『報恩抄』では「真言座主」「真言師」と断じている。日蓮の慈覚・智証に対する批判は多い。例えば『四信五品抄』には、

恐くは中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、天台・伝教の善知識に違背して、心、無畏・不空等の悪友に遷（うつ）れり。（真蹟・定遺一二九六頁）

とある。『大田殿許御書』（定遺八五五頁）等にも同様のことが記載されている。故に、日蓮の立場は、善無畏・不空・弘法・慈覚・智証等の系譜ではなく、天台・伝教の系譜である。

しかるに、日蓮の思想は「古天台を踏む」という見解と、「古天台を踏まない」という見解がある。島地大等は、

新仏教を派生したが、爾後の日本仏教は禅・念仏・日蓮の三系統を幹流とし、それ等が最も有力に人心を支配した。さてこの禅・念仏・日蓮等の仏教は何を母体として産声を揚げたのであろうか。

印度學佛教學研究第五十八卷第一号 平成二十一年十二月

日本仏教史上、この場合先ず推すべきは日本の古天台であろう。（『教理と史論』一二三頁）

と述べている。だが、前述のように、日蓮の立場は、慈覚・智証等に連なる系譜ではない。立正大学の研究者においては、「日蓮の思想は中古天台ではない」ということで概ね見解は一致している。中古天台本覚思想は、大日如来を基盤とする思想構造であるが、天台・日蓮の思想は即空即仮即中の教えであり、本体説ではない。

島地は「本覚」について、

日本天台・真言・日蓮等で用ふる本覚は起信論のそれとは、その義を異にしている（同一一二頁）

と述べている。しかし、日蓮の立場は、「起信論の本覚と異なる義」の系譜ではない。その理由は、『観心本尊抄』に「天親龍樹馬鳴堅慧等内鑑冷然」（定遺七〇八頁）とあり、馬鳴を内鑑冷然と評価している。これは日蓮独自の評価ではなく、『摩訶止観』冒頭で馬鳴は、付法蔵の一人であり、妙楽・伝

日蓮遺文の真偽問題に対する一考察（山崎）

教は起信論の随縁真如説を利用して教えを説いている。

このように、日蓮の思想は、島地が主張するような「古天台」や「起信論と義を異にする」系譜の思想ではなく、馬鳴・龍樹・天台・妙楽・伝教に連なる系譜の思想である。（宇井伯寿訳注『大乘起信論』岩波文庫一九九四年「後記」一五八―一六三頁『仏教汎論』岩波書店七〇二頁、拙著一四三―六頁）

さて、立正大学内では「日蓮の思想は中古天台本覚ではない」ということで見解は一致しているが、「無作三身御書」の真偽問題に関しては、見解が分かれている。この見解の相違は、本覚、無作三身、九識等の概念が明確でないために生じたものと思われる。浅井要麟以来の文献学的研究で「無作三身御書」は、偽書・疑義書とされてきた。しかし、「本覚」「無作三身」「九識」を、天台・妙楽・伝教に一貫して流れる法華教学を踏まえて読むと、内容的には「本化別頭の法門を強調する文勢が認められる」（勝呂信静）という見解に整合性があるのではなからうか。

ここでは、日蓮遺文の『日女御前御返事』を取り上げ、同書に記載の「九識」を考察し偽書説の理由を吟味する。（文中の敬称は省略した）

（一）『日女御前御返事』偽書説の理由

①「八葉心蓮華」が記載されている。

【浅井要麟の主張】

胸中の肉団におはしますなりという思想は、かの東密及び台密の八葉心蓮台の輸入でなくて何であろう。且胸中の肉団が九識心王真如の都というのは、理体本覚の思想であり、中古天台と何等撰ぶ所はない。『日蓮教学の研究』二七三頁（平樂寺書店 昭和二十年）

②「九識心王真如の都」の表現が異様である。

【浅井円道の主張】

本尊たる大曼荼羅の所在を『九識心王真如の都』と定めたりする点が平生の日蓮の文体に似ず、偽書らしき雰囲気をただよわせている。『天台本覚論』五六二頁（岩波書店 一九七三年）

③『修禪寺決』の文と、『秘密莊嚴論』の文が記載されている。

浅井要麟『日蓮教学の研究』二七九頁、執行海秀『御義口伝の研究』八九頁（山喜房）、浅井円道『天台本覚論』五六―二頁

（a）『修禪寺決』『修禪寺決的表現を日蓮滅後のものと断定しきれない事情が残る証拠となろうか』（浅井円道『上古日本天台本門思想史』七頁 平樂寺書店）

（b）『秘密莊嚴論』『秘密莊嚴論なる書物は今日現存せず』（同二七〇頁）「最澄にはかかる表現形式があり得るはずはない。」（同七三五頁）

④「九識」の語を使用しており疑わしい。

- (a) 【浅井円道の主張】「一切衆生の心中に遍在する真如法性の理を仮に九識と呼んだ」『天台本覚論』四四二頁
- (b) 【偽書説支持者の主張】九識は別教の法門である。
- (c) 【偽書説支持者の主張】日蓮は九識に関心がなかった。

(二) 『日女御前御返事』偽書説に対する批判

① 真蹟の完備する『忘持経事』に八葉蓮華説はある。

【勝呂信静の主張】

- (a) 真蹟の完備する忘持経事に『心性の妙蓮忽ちに開き給うか』とあるのも八葉蓮華説と無関係ではないだろう。『日蓮思想の根本問題』一九六五年 五一頁
- (b) 八葉蓮華説の有無をもって真偽判定の基準とすることには無理がある。『御遺文の真偽問題』『現代宗教研究 第三二号』所収・日蓮宗務院一九九八年

② 『日女御前御返事』は教義の表現法が異なるだけである。

【勝呂信静の主張】

標準遺文における本覚思想と八葉蓮華説における本覚思想とは教義形式の表現法が異なるだけで本覚思想そのものにおいては異なっていないように思える。『日蓮思想の根本問題』五一頁

③ 『修禅寺決』『秘密莊嚴論』の記載は偽書の理由にならない。

【山崎の主張】

- (a) 中古天台の文献や伝教の偽撰を引用することが偽書の理由になるならば、『観心本尊抄』に『本理大綱集』

日蓮遺文の真偽問題に対する一考察(山崎)

の抜書き箇所(華嚴経にいわく、究竟して、乃至断諸法中惡)定遺七〇八頁)がある。「日蓮は『本理大綱集』を伝教の真撰でないとの上で(観心本尊抄に)引用した(要旨)」(浅井円道稿『天台本覚論』五五〇～一頁)と同様に、「日蓮は『修禅寺決』を伝教の真撰でないとの上で(日女書に)引用した」とも言える。引用文は教義と関係しない。

(b) 『秘密莊嚴論』は現存せず偽書の理由にならない。

④ 「九識」道後真如」は天台妙楽釈を踏まえるべきである。

- (a) 【山崎の主張】「九識」は、唯識と天台妙楽説において、基本概念は「道後の真如」である。「道後真如」の義は「転依」「浄識」「出纏位の真如」である。「道後の真如は即ち因果なり」(『法華文句』大正蔵三四 一一〇下)、「妙覚証後を名づけて道後と為す」(『法華文句記』大正蔵三〇七上)である。故に、九識は、一切衆生の心中に遍在する単なる真如法性の理ではない。

- (b) 【山崎の主張】唯識説の「九識・阿摩羅」は権大乘の義で、天台妙楽釈の「九識・菴摩羅」と、「義」は異なる。天台は類通三法の解説において、三識(菴摩羅識・阿黎耶識・阿陀那識)を三軌に配している(『法華玄義』大正蔵七四四中)。「三道三識・乃至・三徳」のみならず「一切の三法」は三軌と融す(『摩訶止観』大正蔵四六 二三中『摩訶止観弘決』二二一中下)。よって、類通三法の「菴摩羅

日蓮遺文の真偽問題に対する一考察（山崎）

識（九識）」は、撰論唯識の概念ではない。『始聞仏乗義』等に「三道即三徳」（定遺一四五二頁）の教えを説いており、日蓮が「三識即三徳」を踏まえていることは当然である。故に、『日女御前御返事』に記載の「九識」は、法華円教を踏まえた「道後真如」の義で解釈されるべきである（『法華文句』大正蔵三四・一一〇下・『法華文句記』同三〇七上・『法華玄義』大正蔵三三・七四四中『法華玄義釈籤』同八九九上）。

（c）【山崎の主張】日蓮の在世当時、流布していた九識は密教の「九識」法界体性智「大日如来」であった。この「九識」法界体性智は、不空三蔵以後、唯識の四智に加上された。密教の九識説は本体説の構造である。真諦は本体説を批判しており、真諦訳論書と密教の間に思想的関係はないといえる。日蓮は、『注法華経』に『撰大乘論』の二訳を記載するなど、撰論・法相の相違を認識し、撰論派の「九識」、天台の「菴摩羅識（九識）」、密教の「九識」の相違に精通していた。当時流布した密教義に変貌した「九識」に対し、「三国四師」と名乗る日蓮が、関心を持たなかったということはありえない。

（三）まとめ

「九識」を、善無畏・不空・弘法・慈覚・智証に系譜する

思想で解釈するならば、中古天台本覚思想の「九識」であり、基盤を想定する本体説・基体説といえる。

しかし、日蓮遺文を踏まえると、日蓮の思想は、馬鳴・龍樹・天台・妙楽・伝教に系譜する思想であり中古天台ではない。天台妙楽の思想は円融の法華思想であり、「九識」の基本概念は「道後真如」「出纏位の真如」である。法華円教を踏まえて『日女御前御返事』を読解すると（二）で述べたように、「偽書説」の理由は消滅する。

なお、『日女御前御返事』の「九識」を「万物の本体・根源」とみなし、日蓮の思想を大きく逸脱した九識靈断説が流布している。かかる説は、仏教思想・唯識思想・日蓮の思想とは全く無関係であることは言うまでもない。拙著『九識靈断説の問題点―仏法に非ざる外道の思想―』『補遺』（二〇〇九年地涌塾「靈断問題を考える会」二〇一―二五〇頁）

（キーワード）道後真如、九識、中古天台、本覚、大乘起信論

（日蓮宗教師・久遠結社教導）